

## 死より生命いのちに (3・8・17)

橋本 實 (昭19・文甲)

ただ今御紹介にあずかりました橋本でございます。「死より生命に」について語らせて頂きま  
す。

「死」と云いますのは、靈魂の死、全人類の靈魂の死を意味します。人祖アダムがサタンのす  
すめにより、神から禁ぜられておりました禁断の木の果、善悪を知る実体を食べて、アダムの内  
に原罪が入り、アダムの靈魂が死んでしまったのです。神が実在し給うのに神が見えず、神の声  
がきこえない。神に関しては、全く無知蒙昧となつてしまつたのです。宗教につきましては、大  
きな混乱と複雑が今に至るまで生じて来ているのです。全人類に死が遺傳的に入つてきたからで  
す。

「生命」と云いますのは、靈魂の生命、永遠の生命のことです。私共の靈魂の内にひそむ罪と  
死を全く一掃する愛の生命のことです。

ロマ書五章に、「それ一人の人（アダム）によりて罪は世に入り、また罪によりて死は世に入り、凡ての人、罪を犯しし故に、死はすべての人に及びり。律法のきたる前にも罪は世にありき。然るにアダムよりモーゼに至るまで、アダムの咎と等しき罪を犯さぬ者の上にも死は王たりき。されど恵の賜物はかの咎の如きにあらず、一人の咎によりて多くの人の死にたらんには、まして神の恵と一人の人イエス・キリストによる恵の賜物とは、多くの人に溢れざらんや。……もし一人の咎のために一人によりて死は王となりたらんには、まして恵と義の賜物とを豊かに受くる者は、一人のイエス・キリストにより生命に在りて王たらざらんや。されば一つの咎によりて罪を定むることのすべての人に及びしごとく、一つの正しき行いによりて義とせられ、生命を得るに至ることもすべての人に及びり。それは一人（アダム）の不従順によりて多くの人の罪人とせられし如く、一人（キリスト）の従順によりて多くの人の、義人とせらるるなり。……罪の増す所には恵もいやませり。」

アダムによって死が全人類に及び、全人類が亡び失せることを神は望み給わず、肉体をとつてこの世に來り、我らのために十字架にかかつて贖いを全うし、罪も死も全く一掃し、愛の御手にしかと抱きしめ給います。だからこそ、「罪の増すところ恵もいやませり」と、主の愛をほめたたえなければなりません。

ヨハネ伝一章に、「太初（はじめ永遠のはじめ）に言（コトキリストのこと）あり、（イエスは永遠の太初

から実在し給う永遠の実在者だ)言は神(御父)と偕ともにあり、言は神なり。この言は太初に神と偕ともにあり、萬の物この言によりて成り、成りたる者に一つとしてこれによらで成りたるはなし。(天地万物の創造者、私共の創り主はこの言の神です。この言に不可能はありません)これに生命あり、この生命は人の光なり、光は暗黒に照る。もろもろの人を照らす真の光ありて、世に來れり。(我らはこの光に照らし光と化するために言は受肉して來り給うた)彼は世にあり、世は彼によりて成りたるに、世は彼を知らざりき。言は己の国(イスラエル)に來りしに、己の民はこれを受けざりき。(十字架にかけて殺してしまつた)されどこれを受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる權をあたえ給へり。かかる人は血筋によらず、肉の願ねがひによらず、人の願ねがひによらず、ただ神によりて生れしなり。言は肉体となりて我らの内に宿り給へり。(両親から生れる者は皆遺傳的に罪と死をもつ、キリストの出現はロゴス御自身が乙女マリヤの内に宿つて肉体をとり給うた、唯一の存在。)我らその榮光を見たり、げに父の独子ひとりごの榮光にして恩恵めぐみと真理まことにて満てり。(主イエスは言の肉体现であつて、本質は永遠の言、永遠の実在者、贖あがなひのために人性をとり給うた)ヨハネ彼につきて証をなし呼わりて云う、『わが後のちに來る者(主イエス)は我にまされり、我より前まへにありし故なり(イエスの永遠の先在性)とわがかつて云えるはこの人なり』我らは皆、その充ち満ちたる内より受けて恵に恵を加へらる、律法はモーゼによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて來れるなり。未だ神を見し者なし、た

だ父のふところにいます独子の神（イエス・キリスト）のみ神を顕し給へり。」（主イエスの内に活ける神を見ることができ。主イエスは真の神なり）

主イエスは永遠の太初から実在し給うた永遠の神だ、と宣言しております。主イエスは永遠の太初から永遠にわたって生命の流れを形成し給う。すべての人は両親から生まれたが、イエスのみは乙女マリヤから肉体をとり、人間本来の苦悩、罪と死のない神性をもち給います。主イエスはすべての人々のために、罪と死を負い給うて、自ら苦しみ死んで、十字架上に罪と死を一掃し給いました。三日目の早朝、復活し給いました。それから四十日目に昇天し給いました。イエスのみ独一の栄光と愛に充滿してい給います。イエスの他にこの栄光と愛を誰がもっておりましよう。

「言は神なり、この言の内に永遠の生命あり」この言をうけて、靈魂の罪と死を一掃し、永遠の勝利を得なければなりません。光は暗黒に照る。暗黒のまままで光に照らされて光と変ります。「もろもろの人を照らす真の光ありて世に来れり」私共を照らし給う、生命の光をうけて光と化そうではありませんか。条件はただ一つ。この言の神を受けることであり、その御名を信するだけで、我々は本質的に一変して神の子と変ります。「言は肉体となりて我らの中に宿り給へり」罪に死んでおります我々に永遠の生命を与えんために、言は肉体をとって人となって、この世に出現して下さったのです。肉体をとって我々の罪と死を負い給うて十字架上に一掃し給うたので

す。私共は誰でも、イエス・キリストの生命と愛に充滿している内より、生命の言を一言うけて、恩恵に加えられるのです。「我を見し者は父を見しなり」キリストの内に神を見る以外、誰も神を見ることはできません。「未だ神を見し者なし」力強い言葉です。ただ父の内奥にいます独子の神、キリストのみ、神を我らの内に顕し給います。

ヨハネ一書四章に、「神の愛われらに顕れたり、神はその生み給へる独子を世に遣し、我らをして彼によりて生命を得しめ給ふによる、愛といふは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥なだめの供物となし給ひしこれなり、……我らに対する神の愛を我らすでに知り、かつ信ず、神は愛なり」キリスト御自身が我らの罪を負うて十字架にかかり、神の怒りをなだめる平和の供物となり給いました。この故に罪に対する神の怒はやんで、永遠の生命、永遠の愛、永遠の勝利が我らに豊かに与えられます。

今から五千年前に、アブラムが出現しました。注目すべきことに、神御自身がこのアブラムを特別に選び給うて、エルサレムに導き、一言を啓示して、内に宿り、ヤハの神、内に内在して、アブラハムと一変し給うたのです。アブラハムを多くの国民くにたみの父となし給いました。（創世記十七章）我々はアブラハムにならって神の恵を御言によってうけなければなりません。アブラハムの神を我々の神とし、同一の生命に活きなければなりません。アブラハムのように主の御言によって恵まれつづけなければなりません。

創世記十二章に、主の言あり、「汝の国を出で、汝の親族に別れ、汝の父の家を離れて我が汝に示さんその地に至れ。我汝を大いなる民となし、汝の名を大いならしめん。汝は幸いの基となるべし。我は汝を祝する者を祝し、汝を詛ふ者を詛はん。天下のもろもろの族やから、汝によりて幸いを得ん」我々はアブラハムを祝して主の大いなる祝福を得たいと思います。アブラムは幸いの基となったのです。アブラムは直ちに御言に従って移動します。75歳です。主の示し給うたカナンの地、エルサレムに到達します。主がアブラムに顕現して、「我、汝の末にこの地を与へん」と云い給うた所です。ここにおいて、アブラムは自分に顕現し給うた主御自身に壇を築いて礼拝します。エルサレムは五千年前にアブラハムに与えられたことを知らねばなりません。

創世記十五章に、主の御言がアブラムに臨みます。「アブラムよ、恐るる勿れ、我は汝の干たなり、汝の賜物は甚だ大いなるべし」アブラムが、「私に相続人がありません」と申しますと、主は「汝の身より出づる者、汝の相続人となるべし。天の星の数えられぬ程、汝の子孫をふやす」と。アブラムは主を信じました。神はこの信仰をアブラムの義となし給うたのです。

アブラム、99歳のとき主はアブラムに顕現して云い給います。「我は全能の神なり。汝わが前に歩みて全たかれよ、我大いに汝の子孫を増さん」と。アブラムは平伏します。主は云い給いました。「我、汝とわが契約を立つ、汝は多くの国民くにたみの父となるべし。汝の名をこのちアブラムと呼ぶべからず、汝の名をアブラハム（多くの人の父）と呼ぶべし。我、汝を多くの国民の父と

なせばなり。」

アブラムは99歳にして主の御言「我は全能の神なり」を拝領します。これは神の本質を表した言ですから、特に御名と云います。アブラハムは御名を内に拝領して、本質が一変して神と化します。アブラハムが死より生命に移った一瞬です。永遠の生命をうけた瞬間です。この時、主は「汝は多くの国民の父となるべし」と契約を立てておられます。アブラハムは単にイスラエル民族の父であるだけでなく、多くの国民の父なのです。されば多くの国民よ、アブラハムを注目し、アブラハムを模範とせよ。アブラハムは我らの救の原型なのです。

アブラハムは最初にエルサレムに来た人であり、このエルサレムにおいて主の顕現に接します。栄光の御名を拝領します。そしてイスラエル民族はもちろん、多くの国民の父となります。翌年イサクが生まれます。主は、「エホバにどうしてながたき事あらんや」と云い給うて、老いて女性たるの機能を停止した妻サラはイサクを生みます。顕著な奇跡という他ありません。

イサクが10歳頃のことでしょう。神は「このイサクを燔祭として献げよ」と命じ給います。折角与えられた子供を献げよ、とは何という矛盾だ、と文句を全く云わないで、唯々諾々としてアブラハムは実行します。アブラハムは翌朝早く起きて驢馬を用意し、薪を割り、イサクをつれて参ります。神の示し給うたモリアの地に赴きます。アブラハムは燔祭と薪をとってイサクに負わせ、手に火と刀をとって進んで行きます。イサクはアブラハムに「燔祭の小羊はどこにあります

か」と尋ねます。アブラハムは「神御自身が燔祭の小羊を備え給います」と答えます。その地に到り、壇を築き薪を並べ、イサクをしばって薪の上におきます。アブラハムは手をのべ刀をとつて、イサクを殺そうとします。天使が顕れて「アブラハムよ、アブラハムよ」と云います。「汝の手をイサクにつけてはいけない。汝が独り子を惜まなかつたのだから、汝が神を畏れていることが分つた」アブラハムが見ますと、後方に雄羊がいてその角がやぶに引っかかっています。アブラハムはその雄羊を捕えてイサクの代りに燔祭として献げます。アブラハムはその地をエホバエレ（エホバ備えたもう）と名づけました。

天使が主の御言を伝えます、「汝の子、独り子イサクを惜まざりしによりて、我大いに汝を恵み、又、大いに汝の子孫を増して天の星の如く、浜の砂の如くならしむべし。汝の子孫はその敵の門をとらん。又汝の子孫によりて天下の民、皆幸いを得べし。汝わが言に従いたるによりてなり」アブラハムが100歳の時にイサクが生れ、この末が現イスラエル民族です。アブラハムはこの血筋の父でありますが、それだけではなくその他多くの民族の父、信仰の父でもあります。

我々が主の恵をうけるのは御言によつてです。我々の指導原理は主の御言なのです。

主イエスは使徒行伝一章において、「バプテスマのヨハネは水にてバプテスマを施すが、我は聖霊にてバプテスマを施す」と云い給いました。ヨハネ伝三章に主イエスは、「水と霊とによりて生れずば神の国を見ること能わず」と宣べてい給いますが、この「水」はロゴスの象徴であり、



「と」というのは「即ち」の意味なのです。「ロゴス即ち聖霊によりて新たに生れて神の国の栄光を鮮明に心の内に見よ」との意味です。キリスト教では聖霊を無視して、水の洗礼を施してその者を教会名簿にのせます。天国にも生命の書があり、聖霊をうけた者がしるされます。天国の書と教会名簿とは全然何の関係もない所に問題があります。我々の模範とすべき「父」なるアブラハムはいつ水のバプテスマをうけているでしょうか。

旧約聖書第一頁二行目に、「神、光あれ、と云い給いければ光ありき」とあります。云い給うのは御子ロゴスの神です。御子ロゴスの神「光あれ」と云い給えば、直ちに光あり、です。

新約聖書の最後の頁に、「渴く者は来れ、望む者は来れ、望む者は価なくして生命の水（生命の言）をうけよ」  
渴く者よ来れ！望む者よ、代価を要せずして生命の言をうけよ！天国に入れよ！今、心の内に天国を見よ！「神の国はここにあり、かしこにあり、と云わざるべし。神の国は、視よ、汝らの心の内にあるなり」永遠の生命の言によって新たに生れた者の内にこそ、天国はあるのです。

旧約聖書の第一頁から新約聖書最終頁まで一貫して聖書の証するものは言です。聖書の証の主体は言です。言こそキリストの本質であり、実体であり、これこそ永遠に存続する福音なのです。この福音はロゴスであり、永遠に古く、永遠に新鮮です。

ヨハネ伝四章に、「そのじつ、イエス自らバプテスマを施ししにあらず、その弟子たちなり」とあります。我々はイエスの弟子たちに従うのではなく、イエス御自身に従い、イエス御自身の

御心を行わねばなりません。

ヨハネ伝五章に、「誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給ひし者を信ずる人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。誠にまことに汝らに告ぐ。死にし人、神の子の声をきく時来らん。今すでに来れり、而してきく人は活くべし」

「あなたはいかなる教派に属するか？ カトリックか、それともプロテスタントか」と問う人がいます。私は、どちらにも属しておりません。人間の作ったものには属しません。永遠の言の永遠の流れに生きております。ある教派は、パンとぶどう酒に永遠の生命がある、と主張しますが、聖書の中にはそんなことは出ておりません。又、水のバプテスマを永遠の生命に生まれる重要儀式としますが、これも聖書を曲解したものです。これらのことが真理だとすれば、新約聖書にも旧約聖書にもくり返し出てこなければなりません。

両親から生れた者は例外なく、先天的に罪と死をうけつぎ、罪と死の束縛の下にあります。罪と死の重荷の下にある人間は、一人も義人なし、と聖書は云います。マリヤは聖女だ、として崇拜する教派もありますが、マリヤが神から選ばれたのは信仰の故であります。ルカ伝一章に、天使がマリヤに顯れて、『視よ、なんじの親族エリザベツも年老いたれど男子を孕めり。石女と云われたる者なるに、今は孕りてはや六月になりぬ。それ神の言には能はぬ所なし』マリヤ云ふ『視よ、われは主の婢女なり、汝の言のごとく我に成れかし』ついに御使はなれ去りぬ。』この

マリヤの信仰と献身をよしとして天使は去って行きました。この瞬間マリヤはロゴスを内に宿したのです。

「終生童貞なる聖マリヤ、我らを憐みたまえ」という、ある教派の祈禱文がありますが、マタイ一章に「されど子イエスの生るるまではヨセフとマリヤと相知ることなかりき」とあり、マリヤが終生童貞であることを聖書は否定しております。現に、ヨセフとマリヤとの間には子供ができております。この教派の教典は虚偽の上に構成されたものと云わねばなりません。主イエスこそ愛の神の顕現であり、我らの信仰と祈りの対象でなければなりません。このイエスにおいて、他に我々が憐みを懇願する者はありません。

言の神は、人間を最後に、神の像かたちに似せて作りたまひ、人間の内に靈魂を吹きこみ給いました。アダムによって人間の内に死が来り、死の重圧下に圧倒されている人間のために、自ら十字架上に苦しみ、罪も死も苦悩も一掃し給いました。復活し給うた主イエスは云い給います、「平安汝にあれ」「聖靈をうけよ」「生命をうけよ」「天の門に入れ」「我汝を贖えり、汝の名を呼べり、汝はわがものなり」「我らは皆、キリストの充滿ちたる内より生命の言をうけて、恵に恵を加えらる」(ヨハネ伝一)

イエスを神の子、キリストと信ずることが、永遠の生命をうけ、死より生命に入る唯一の条件です。神がイエスを遣し給うたのですから、このイエスをうけ入れて、信じなければなりません。

「すべて主の御名を呼び求むる者は救はるべし」(ロマ書十)ただイエスを主と信ずるだけで永遠の生命が与えられるのですから、「神は愛なり」と申さねばなりません。「これらのこと(聖書)を書きしるしたるは、イエスの神の子、キリストたることを信ぜしめ、信じて御名によりて永遠の生命を得しめんがためなり」(ヨハネ伝二十)「神の御心は子イエスを見て信ずる者の、永遠の生命を得るこれなり」(ヨハネ伝六)「私共の信仰の対象は主イエスであり、神の賜物は永遠の生命の言なのです。」

カルバリ山上に三本の十字架が立てられます。真中に主イエス、両側に悪人がかけられます。一人の悪人はイエスに、「お前はキリストではないか。自分自身と我らを救へ」と云います。もう一人の悪人は主イエスを見つめます。主イエスをじっと注目することから救いは生じます。この悪人は、主御自身が自分自身の罪のために苦しみ給うことを知り、深く自らの罪を認めます。「私がこんな目にあっているのは、自らの罪のためですから、当然のことです。けれども主イエスは何の悪もなし給わず、我々の罪を負うて苦しみ給います。この主イエスは天へ凱旋し給うべきお方です。主イエスよ、御国に入り給う時、我をおぼえ給え。(信仰と祈りの対象はイエス御自身であって、御父ではありません)私の一切の罪は御自身の贖いによって全く一掃されました。御自身の生命が私に迫ってまいります。」

主は云い給いました。

「今日、汝、我と偕に天国パラダイスにあるべし」

彼の内面に天の平安がどつと流れこんでまいります。主イエスを注目しつづけ、ほんの数分間の問答で、ほかに何もしないで、過去のすべての罪はキリストによって一掃され、キリストの生命が、脈打って彼の内に入ってまいります。自分の運命の行き先が、陰府よみから天国へと、余りにも正反対の大変化をうけます。運命の大転換が起こりました。死より生命に移った瞬間です。じつに「神は愛なり」というほかありません。

主イエス御自身を、神の子キリストと信じて、全心全霊をおささげして、死より生命に、運命の大転換を体験しようではありませんか！ 罪の質も量も問題ではありません。我々の罪のために、主イエスは人となって来り、十字架にかかり、甦り給うたからです。ひとえに我々の罪の贖いのためなのです。我々は、ただキリストの生命と愛の流れに没入することです。「罪の増す所、恵もいやませり」「神は愛なり」

ウィリヤム・モーム自身も、実際に大罪を犯してはいないけれども、いかなる罪も犯しかねない要因をもっている、最大の罪人だ、と云っております。

聖パウロは救われるまでの名をパウロと申します。救われた瞬間、本質も名前も一変したのです。パウロはステパノが石で打たれて殉教死しましたとき、これを「よし」とした者です。

ステパノはユダヤ教最高幹部の前で、力強く最後の証をいたします。証が終に近づいて、「ダ

ビデ、神の前に恵を得て、ヤコブの神のために住み家を設けんと求めたり。而して、その家を建てたるはソロモンなりき。されどいと高き者は、手にて造れる所に住み給わず、即ち予言者の、『主、のたまわく、天はわが位、地はわが足台なり。汝らわがためにいかなる家をか建てん。わが安みの所はいづこなるぞ……』(使徒行伝七)

ほとんどの人は、教会といえばチャペルだ、と思います。神はチャペルに住み給う、と。しかし、ステパノはここでダビデ、ソロモンを非難しております。ダビデは神殿を建てようと思つて果さず、神殿を建てたのはソロモンであつた。しかし活ける全能の神は、人が手にて造つた所には住み給わない。さらば、神の安み所はどこであらう。キリストは云い給いました。「汝の心を我に与えよ。我、汝の内に宿りかつ歩まん。汝らはわが神殿なり。汝らこそわが永遠の宮なり」と。主は我々人間をこんななまで愛し給います。我々人間の内に宿つて我々を永遠の宮となし給います。「神は愛なり」と叫ばなければなりません。

ステパノは殉教します。この日に、エルサレムにある教会(信者たち)に対して大いなる迫害がおこります。その迫害の最先端にサウロは立つておりました。「主イエスは甦り給うた、イエス・キリストは主なり」と証するキリスト者を、サウロは片っ端から捕えて殺してゆきました。更に大祭司の所に行つて、ダマスコにある諸会堂への迫害許可証をもらいます。キリストを証する者を縛つてエルサレムへ曳いて行くためです。ダマスコに近づいて行きましたとき、忽ち天よ

り強烈な光が発して、サウロをめくり照らします。サウロは地に倒れて、「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか」という声をききます。サウロは、「主よ、汝は誰ぞ」と問いますと、「我は汝が迫害するイエスなり」との御声をききます。迫害者サウロの前に復活の主は顯れて、「我を信じ、我を心の内に体験した小さき者たちと、我とは永遠に一体なり、汝が彼らを打つのは、即ち我を打つのだ。されどとげある鞭は蹴り難し」と。これがパウロの回心体験です。この時から本質はキリストと合一し、キリストが彼のすべてとなり、名前も変ります。パウロとなったのです。

救われる直前に、サウロは自らの罪のために深い苦悩に陥ります。律法に「殺す勿れ」「我のみを神として拝せよ」とありますのに、ステパノの殺されるのをよしとし、イエスの殺されるのを是認したからです。つづいて、実に多くのキリスト者を捕えて死にわたします。自分は正に律法と反対のことをしている。「我は罪人のうち頭なり」「わが欲する所の善はこれをなさず、反つて欲せぬ所の悪はこれをなすなり……善を為さんと欲する我に悪あり、との法をわれ見出だせり……わが肢体のうち別な法ありてわが心の法と戦い、我を肢体の内にある罪の法の下にとりことするを見る、ああ我悩める人なるかな！ この死の体より我を救はん者は誰ぞ」（ロマ書七章）サウロは自分を「この死の体」と表現しております。自分の霊魂が原罪に死んでいることを発見しました。自分は死の霊魂を被おほっている物的な体にしかすぎない。自分は亡びの人間だ、最悪の人間だ、こんな最悪の人間のために主イエスは死に給うて、この内面に巢食くわくっている罪も死も完

全にひきとり、一掃し給うたとは！パウロは平伏して主イエスを神として高らかに礼拝します。パウロは御名によって永遠の生命に活かされました。「汝はわが名をもち行くわが選びの器なり」迫害者の先頭に立っていた者が、キリストの御名を伝達する大使徒と一変したのです。パウロは伝道の最先頭に立って叫びます。「イエス・キリストはじつに死より甦り、しもべに頭れ給えり。イエスは主なり」と。新聞もテレビもない、当時の人々は大いに驚き又、恐れしました。

コリント後書三章に、「主に帰するとき、その面被おおいはとり除かるべし。主は即ち御霊なり。主の御霊のある所には自由あり。われらは皆面被おおいなくして鏡に映るごとく主の栄光を見、栄光より栄光に進み、主たる御霊によりて主と同じ像かたちに化するなり」

コリント後書四章に、「我らこの宝（キリスト御自身、永遠の生命）を土の器にもてり」ロマ書七章において「死の体」といって、自らの内面の死に絶望的な苦悩を感じましたパウロは、キリスト御自身を内に体験して、深刻な苦悩から解放されて自由を味わい、土の器（肉体）の内にキリスト御自身を宿して、愛の香りを放つ者と一変したのです。

私は昭和十九年十月、東大法学部に進学しました。十月に入りますと、B29が銀翼を輝かせて、東京上空に偵察にやってきました。応召する者が出てまいりました。十一月二十日頃、法学部で壮行会が催されました。数名の教授が一人十分ずつ壮行の辞を述べました。最後に南原教授が壇上に立ってこう話されました。「……十字架上の主イエスは『父よ、わが霊を御手にゆだね』と、



御父にすべてを委託し、献身し給いました。この主イエスの御父に対する全き信仰と委託から、三日目の復活、更に四十日目の昇天が起こったのです。全き委託と献身から、予想もできなかったことが起こったのです。諸君も主イエスに対して『主よ、わが霊を御手にゆだね』全心全霊を主イエスに奉獻して下さい。予想もできないことが必ず起こります……」全き信仰、全き献身を強調されました。一同うなりました。大きな感動がおこりました。十二月十五日入隊しました。蒙古にまいりました。釜山からずっと停車しないで行ったのです。京包線の終点「包頭」の一つ手前の「東大社」で降りて二里程歩いた所に兵舎がありました。そこで訓練を受けました。三月に黄河がとける前に急いで黄河を渡って列車に乗り、中支上海の近くへ行きました。米軍上陸に備えるためです。八月に入ってソ連軍が参戦したから、蒙古へ行け、との命令をうけて列車に乗りこみました。前には終点「包頭」まで行きましたが、今度は途中までしか行けません。この近くにソ連軍が強固な陣地を布いて待っているから、ここで降りよ、ということでした。朝三時頃でまだ暗かった。手榴弾を二個もらっただけです。ほのぼのと夜が明けてきました。少年が朝刊を配っておりました。第一面に「日本無条件降伏」が大きく出ておりました。降伏など全く予想もできないことでした。南原先生の云われたことがその通りに起こったのです。一度も戦わないで、全然爆弾の音も、銃声もきかないで、帰って来ました。

東大に復学しましたら、南原先生が総長になっておられました。昭和二十三年六月最後の政治

学史の授業で、南原先生は、「ギリシャ精神とキリスト教をいかに調和させるかが、私の生涯の課題です」と云って終了しました。試験をうけに行きましたら、問題は、「ギリシャ精神とキリスト教との関係」でありました。私はヨハネ伝六章を中心にしてキリストの福音の神髄を強調しました。「…我を食う者は我に居り、我も彼に居る」（キリスト御自身を内に体験して靈的にキリストと一致合一する）「父の我を遣し、我の父によりて活くるごとく、我を食う者も我によりて活くべし」（キリストは全能の御業を行い給うたが、その理由は、内にいます御父を原動力として生きてい給うからだ。我らもキリストを内に体験し、キリストにすべてを献げ、キリストを原動力として生きて、全能の業がなされるのだ）「わが語りし言は靈なり、生命なり」（聖霊、永遠の生命はキリストの語り給う言の内にある）このすばらしい、全能なる、永遠の生命の福音は、どうしてギリシャ精神と調和され得よう。この生命はキリストの言とだけは絶妙に一致合一する。我々はキリストの言、生命の言を伝達せねばならない、と書いたのです。

南原先生はキリスト教とギリシャ精神とは調和できる。いかに調和させうるか、という問いでありましたが、私は両立調和し得ない、と批判したのです。結果は、はからずも「優」でありました。東大総長と東大法学部の偉大さを実感しました。

昭和三十二年頃、南原先生がテレビで記者会見をしておられました。その中で、「今にすぐキリストに徹底した、キリスト御自身を証する器が出ますよ」記者が「本当に出ますか」「出ま

すよ」と明言しておられました。

私にとりまして、「神」、「救い主」はキリスト御自身であり、「父」は五千年前のアブラハムであり、「尊敬する人物」は南原先生なのです。東大を米軍に接収する予定で、東大を空襲から完全に残したのですが、南原総長が、マッカーサーを訪問されまして、懇願された態度が理想的な学長らしい好感のもてるものだったので、マッカーサーは快く予定を翻した、ということでした。南原先生の演説は、はぎれよくて内容が深く、とても感動的でいつも東大生をうならせました。

死より生命に移った瞬間、「死は勝に吞ハまれたり」と録されたる言は成就すべし。「死よ、汝の勝はいずこにかある。死よ、汝の刺ハはいずこにかある。……されど感謝すべきかな、神は我らの主イエス・キリストによりて勝を与えたもう」(コリント前書十五章)「おおよそ神より生るる者は世に勝つ。世に勝つ勝利は我らの信仰なり」(ヨハネ一書五章)「汝らもし常にわが言におらば、真にわが弟子なり。また真理を知らん。而して真理は汝らに自由を得さすべし。……すべて罪を犯す者は罪の奴隷なり。……子イエスもし汝らに自由を得させば、汝ら実に自由とならん」(ヨハネ八章)

死より生命に、束縛より自由に、罪と死の重圧より永遠の生命の躍動に。何ものもこの自由を奪い損うことはできません。「もはや我生くるに非ず、キリストわが内にありて活くるなり」律法の提供者自ら生命となって我らの内に宿り給い、御自身の全能力を以て律法を完璧に守り給い

ます。律法的敗北から生命と愛の大勝利に転じます。キリスト御自身による運命の大転換です。これを自由と云います。アブラハムがイサクを直ちに献げるべく行動したのも、自由の大勝利です。自由は己を献げて大勝利を生み出します。自己の自由に生きるのとは正反対なのです。

モーゼ80歳のとき、ホレブの山において異様なものを見ます。燃ゆる柴です。普通なら火が燃えますと、燃えるものは焼きつくされて、火は消えてしまします。この時は柴は燃えつづけていて火は消えないのです。柴は主イエスの人性の象徴です。火はイエスの人性の内に燃える神性、言です。エホバの神（主キリスト）この燃える柴の中からモーゼを呼び給います。「モーゼよ、我必ず汝と偕にあるべし。汝エジプトに行きて栄光をあらわせ」モーゼは問います。「もし私がエジプトにまいりまして、イスラエルの民が、お前を遣した神の名は一体何と云うのか、と私に尋ねましたら、どう答えますよう。あなたの御名は何ですか」。エホバは云い給う「我は有りて在る者なり、これ永遠にわが名なり」と。（出エジプト記三章）モーゼの質問が奮っているではありませんか。最高で最重要の御名とは何かを尋ねます。御名をうけた瞬間、モーゼはキリストを内に宿して大モーゼと一変します。モーゼの最大関心の御名を教会は全く知りません。

イザヤも、「我はエホバなり」との御名を内に体験します。イザヤが「我はエホバなり」と何度もくり返し述べておりますのは、自分の内に主御自身の御名が明確に印刻され、御名が内面に燃えているからなのです。

あの百卒長、ローマの軍隊の小隊長が、主イエスの所にやっ来て参りまして願います。「主よ、わがしもべ、中風を病み、家に臥しいてとても苦しんでおります」イエスは云い給いました。「我、行きて医さん」と。百卒長は申します。「我は汝をわが屋根の下に入れまつるに足らぬ者なり。ただ御言のみを賜え。さらばわが僕しもべはいえん。我みずから權威の下にある者なるに、わが下にまた兵卒ありて、これに『行け』と云えば行き、彼に『来れ』と云えば来り、わがしもべに『これを為せ』と云えば為すなり。」イエスこれをきいて感嘆したまい、(イエスが感嘆し給うたのはこの時だけです)「こんな敬虔な信仰は選民イスラエルの中の一人にも見たことがない……」イエス百卒長に「行け、汝の信するごとく汝になれ」と云い給えば、この瞬間に家に臥しておりました彼のしもべはいえたのです。主イエスは空間を超えて一言で大いなる力をあらわし給いました。主イエスにこのような力を發揮させた百卒長も、記念すべき信仰の人と云わねばなりません。我々も、アブラハムのように、モーゼのように、又この百卒長のように、主イエスに迫らねばなりません。「ただ御言のみを賜え! いやしきしもべを御言によって永遠に活かしたまえ! 死より生命に、罪と死の束縛より永遠の自由に入らせ給え! 御自身と同一の栄光の姿に化せしめ給え! ただ一つの御言によって! 御名によって!」

主イエスは世にあるとき、「あととなる者は先に、先なる者はあとになるべし」と云い給いました。現在、イスラエルは依然として律法に支配されております。イスラエルには生命も自由もあ

りません。イスラエルを選民と云い、これ以外のものを異邦人と云います。世界の異邦人のうちには、ユダヤ教よりはるかにまさるキリスト教がある、と思うでしょう。私は、このキリスト教も限られたものであり、キリストの栄光を顕わさない、と云っているのです。

「水」のバプテスマや「おみさ」の儀式は、主イエスの行なってい給わないものです。一大真理は御名です。主イエスは叫び給いました、「父よ、御名の栄光をあらわし給え」と。ここに天より声出でて云う、「我、既にあらわしたり。又更に顕さん」と。(アブラハム、モーゼ、旧約の予言者の内に既に御名を顕した、更に御名を顕わしてゆく)

我らも、イエス御自身に叫ばねばなりません。「主よ、御名の栄光をあらわし給え」と。やがて必ず、律法のエルサレムは御名の栄えるエルサレムに一変します。これを新しきエルサレムと申します。黙示録二十一章、二十二章に新しきエルサレムのことが録されております。

「我また聖なる都、新しきエルサレムの(神がアブラハムに提供し給い、アブラハムはここで御名を拝領しました。主イエスはここで十字架の贖いを完成し、甦り給いました。やがてイスラエル民族がここで御名をうけて、生命の躍動を示します)夫(キリスト)のために飾りたる新婦はなよめのごとくそなえて、神の許を出で、天より降るを見たり。大いなる声の神の御座より出づるをきけり。いわく『神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人、神の民となり、神みづから人と偕にいまして、彼らの目の涙をことごとく拭い去り給わん。今よりのち死もなく、悲しみも、

叫びも、苦しみもなかるべし。先のもの既に過ぎ去りたればなり』かくて御座に坐する者云い給う、『視よ、我すべてのものを新たにするなり』『これらの言は信ずべきなり、真なり、事すでに成れり。我は始なり終なり。渴く者には価なくして生命の水の泉より飲むことを許さん……』』代価を要せずして、ただキリストに対する信仰によって、永遠の生命の言を拝領し、生命に活き愛に燃えようではありませんか！このとき人祖アダム伝来の死は全く消滅し、悲しみも叫びも消え失せます。一切は新たにになります。天国が心の内に到来するからです。永遠の生命と真の自由の躍動が内面に具現します。

ヨハネ伝七章に、「イエス立ちて呼ばはりて云ひ給う、『人もし渴かば我に來りて飲め。我を信する者は、その腹より活ける水（生命の言）川となりて流れ出づべし』この活ける水といふのは、イエスを信する者の受けんとする御霊を指して云ひ給ひしなり」筆者ヨハネは、注を加えてこの活ける水とは聖霊のことだ、と云います。物質の「水」の洗礼や「おみさ」をやめて、全面的に聖霊、永遠の生命、生命の言の体験に賭けようではありませんか！

黙示録二十二章に、「御使また水晶のごとく透き徹れる生命の水の河（生命の言の河）を我に見せたり。この河は神、即ちこ羊の御座（御座は一つです。神の御座、こ羊の御座と二つあるのではありません）より出でて都の大路の真中を流る。（我は道なり。イエスを道と信する者の心の真中を流れ、躍動するのです）河の左右に生命の樹ありて十二種の果を結び、その実は月毎に

生じ、その樹の葉は諸国の民をいやすなり。今よりのち誼はるべきものは一つもなかるべし。神即ちこ羊の御座は都の内にあり、そのしもべ共はこれに仕へ、かつその御顔を見ん。その御名は彼らの額ひたいにあるべし。今よりのち夜あることなし。燈火の光をも日の光をも要せず、主なる神かれらを照らし給へばなり。彼らは世々限りなく王たるべし。これらの言は信すべきなり、真なり。」

現在のエルサレム、イスラエル民族が全くキリストに立ち帰って、キリスト信仰により、御名を印せられます。大変化が到来します。キリストを心から礼拝し、キリスト御自身の御顔を見ます。

イスラエルは昔から「乳と蜜の流るる国」と云われておりますが、乳と蜜、即ち聖霊、生命の言が心の内に満ち溢れて止めどなく流れることが、ここに至って実現いたします。人間を全く一変させるものはキリストの御言であり、御名であります。御名こそ陰府よみのどん底から至高の天へ、一瞬にして引上げる唯一のものです。

キリスト御自身がエルサレムに顕れ、全世界に生命と愛と医しの御言を豊かに注ぎ出だし給います。これが選民イスラエルの回復です。

イスラエルの初代アブラハムはエルサレムにおいて御名を受けて、主御自身と合一しました。主イエスはエルサレムにおいて全き献身と贖いを、勝利の復活を遂げ給いました。アブラハムに



与え給うたエルサレムにおいて、イスラエル民族に同一の御名を印し、主御自身と一致合一させ、御名の栄光を顕し給います。この御名によって、イスラエル民族は世界のキリスト教を、新鮮味のない儀式的キリスト教を大いに超えて、世界の中心国家、栄光輝く最高の国と一変します。御名の栄光を以てエルサレムをおおい、包み給います。「あとなる者は先に、先なる者はあとになるべし」「都の大路はすき通れる玻璃の如き純金なり」信仰をここで純金だと云っております。

「われ都の内にて宮を見ざりき」先に述べましたように、「手にて造れる所に主は住み給はず」主は人工の物体、チャペルには住み給いません。信ずる者を神殿としてそこに主は永住し給います。

「神即ちこ羊はその宮なり」「汝らは聖霊の宮なり」神の都エルサレムには、これまでのキリスト教の教派は存在しません。キリストを信ずる霊魂の内に、主は御名の実体を以て宿り、讚美の声がとどろきわたります。新たななる生命の言こそ、豊かに流れ、高らかに讚美され、エルサレムを都として、全世界にあまねく拡がってゆきます。

エルサレムとは、「平和」という意味です。このエルサレムにおいて、愛の主は御名を以てアブラハムに臨んでアブラハムと平和的一体関係を結び給いました。エルサレムにおいてキリストは十字架にかかって全的に自己奉獻し給い、平和的献身と贖いを成就し給いました。両手を横にひろげて全世界全人類を呼び給います。「我汝を贖えり、汝の名を呼べり、汝のために、汝の罪も死も一切の苦悩も負いつくして、かくなれり。されば、来れよ。我を信ぜよ。平安汝にあ

れ！」三日目の早朝甦り給うた復活の主は、勝利を叫び給います。「我は復活なり生命なり。死よ汝の勝はいずこにかある。今こそ我に來り、わが愛に没入して我と合一せよ。永遠の生命、永遠の平和、永遠の勝利を得よ、」

キリストは最後に、エルサレムに御座をおいて立上り給います。平和の御名を呼ばわり給います。長い間敵対しておりましたイスラエル民族を愛の御手に抱き、平和を成就し給います。彼らはキリストの平和の御顔を見ます。その上、平和の主、御自身の本質なるロゴスをエルサレムから發出して、全世界の求むる人々に賦与し給います。全世界は同一のロゴスに活かされます。全世界は死より生命に移ります。真の平和がエルサレムに実現し、エルサレムから全世界へと具現します。エルサレムを平和の都とし給うて、ロゴスの炎、愛の炎はエルサレムにおいて盛んに燃え上り、全世界に転火して、全世界は同一のロゴス、愛の炎に燃え上ります。

ロマ書十章に、「御言は汝に近し。なんじの口にあり、なんじの心にあり。これ我らが宣ぶる信仰の言なり。……すべてイエスを神と信ずる者は辱しめられじ。同一の主は万民の主にましまして、すべて呼び求むる者に対して豊かなり。すべて主の御名を呼び求むる者は救はるべし。されど未だ信ぜぬ者をいかで呼び求むることをせん。未だきかぬ者をいかで信ずることをせん。宣べ伝うる者なくばいかできくことをせん。遣されずばいかで宣べ伝うることをせん。ああ、美はしきかな、よき事（生命の言）を告ぐる者の足よ！……かく信仰はきくにより、きくはキリスト

の言による……」

コリント前書第一章に、「我は感謝す。クリスポとガイオとの他には我なんじらの内の一人にもバプテスマを施さざりしを。これわが名によりて汝らがバプテスマを受けしと人の云ふことなからんためなり。(今日、各牧師は進んでバプテスマを施して自分一個人の信者をふやし、これを教会員として献金を命じ、経済的に恵まれて喜んでおります。キリストは、パウロは、このよ  
うな献金を課し、献金をうけとつただろうか。「価なしに受けたれば、価なしに与えよ」またステパノの家族にバプテスマを施ししことあり。このほかには我バプテスマを施ししことありや、知らざるなり。そはキリストの我を遣し給えるは、バプテスマを施させんためにあらず、福音をのべ伝えしめんとなり……それ十字架の言は亡ぶる者には愚かなれど、救はるる我らには、神の全能力なり」

問題の焦点はイエス御自身です。ヨハネ伝五章に、「子(イエス)を敬はぬ者は、これを遣し給いし父をも敬はぬなり」

イエス御自身、我らの罪も死も一切の苦悩も負い給うて十字架にかかり、我らのために自ら苦しみ、生命をすて給うて、罪、死、苦悩を一掃して下さいました。

「我、汝を贖へり。汝の名を呼べり。汝はわがものなり。我汝のうちに宿り、かつ歩まん。汝の心を我に与へよ」

「罪の増す所、恵もいやませり」主は我らを限りなく愛し給います。最低から最高の天を見上げて、希望と信仰に躍ろうではありませんか、キリストの御手に抱かれるようではありませんか。「罪人のうちにて我は首なり」キリスト御自身に対して挑戦しましたサウロさえも、主は一瞬にしてくつがえして最高の天に移し、最高の器となし給いました。十字架上にて悪人を陰府から天国へ移し給いました。

この大事な人生、大事な靈魂をキリスト御自身に奉獻委託して、キリスト御自身の御言によって一変して頂き、すばらしい神殿と変えて頂きたいと存じます。主は十分なし得給います。「我は全能の神なり、我汝を贖えり」

自由にあこがれ、自由を謳ってまいりました三高OB諸兄よ、真の自由をキリストによって今体験して頂きたいのです。自由をたたえていた我ら、今こそキリストと合一して、永遠の自由を体験し、満喫しようではありませんか！

「もはや我生くるにあらず、キリスト御自身わが内にありて活くるなり」

「死は勝に吞まれたり」死より生命に！ 永遠の生命の永遠の流れの中に浸ろうではありませんか！

「我が語りし言は、靈なり生命なり」(ヨハネ伝六)

永遠のロゴス！ 永遠の生命！ 永遠の愛！ 永遠の勝利！ 永遠の自由！ 永遠の平和！

「神の遣し給ひし者は神の言を語る。神、御霊を賜ひてはかりなければなり」(ヨハネ伝三)

「我、汝の内に宿り、かつ歩まん」「汝の心を我に与えよ」

「我は全能の神なり」

「我は復活なり生命なり」

「神は愛なり」

かくて、暗黒は光に、詛いは御名の大讚美に、罪に冷えきった靈魂は永遠にもえる愛熱の焰に、死につながれていた自由なき靈魂は、永遠の生命の躍動する歡喜の天的自由に、死より永遠の生命に、今こそ、百八十度の大転換をしようではありませんか！

これをなし得る者は、ただ言なるキリスト御自身のみです。

『言は神なり』

これで終ります。御静聴有難うございました。

(キリスト伝道者)